

『春琴抄』の二つの中国語訳に見られる翻訳方略と規範について —記述的翻訳研究のケース・スタディーとして

尹 永順 (YIN yongshun)

(神戸大学国際文化学研究所言語コミュニケーション講座)

According to Gideon Toury's Descriptive Translation Studies, this paper based on society and literature system of target culture focuses on translation strategies and translation norms explored in two different Chinese versions of Tanizaki Junichiro's Syunkinsyo. One of them is Mu rugai's work (1939) published in the Manchuria which was occupied and controlled in Japanese Assimilationism Policies and Thought. Another was translated by Zheng minqin (2007) under the background of globalization including well-balanced development in society, culture and economy, and frequent intercourse between China and Japan. In conclusion, different translation strategies and translation norms have used in two Chinese versions through comparing Chinese characters and locutions. Mu rugai's work employs literal translation and accord with source norms. Zheng minqin's translation makes use of free translation which is subscription to norms originating in the target culture.

1. はじめに

優れた文学作品には何種類もの翻訳テキスト(以下:TT)が現れることがある。トゥーリーは翻訳の定義として「目標システムにおいて翻訳として現れているもの、および目標言語の読者が翻訳とみなすもの全て」であると考えている(Toury, 1995:32)。つまり、どんな訳文であれ、目標文化において翻訳である理由が述べられるなら、翻訳とみなす考え方である。記述的翻訳研究は起点テキスト(以下:ST)を完全に移植するような完璧な翻訳はありえず、同一作品でも翻訳者と時代の変化に伴って様々な訳文の産出が可能であると考え。というのは、記述的翻訳研究では言語そのものに焦点を当てるといより、翻訳の動機及び目標文化、社会における翻訳の役割を探ろうとするからである。したがって、訳文が与えられた時、その忠実性に注目するのではなく、翻訳者がどのような社会・文化背景をもとに、もしくはどうしてある特定の

YIN yongshun, "Translation strategies and norms in two Chinese versions of Syunkinsyo: A case study of Descriptive Translation Studies," *Interpreting and Translation Studies*, No.9, 2009. pages 195-209. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

翻訳方略を用いたのか、という問題を重要視する。

本稿はトゥーリーの記述的翻訳研究の視点から、谷崎潤一郎の『春琴抄』の二つの中国語訳を比較分析し、翻訳方略と翻訳規範を考察するものである。中国では、『春琴抄』は谷崎潤一郎の代表作として受け入れられ、翻訳回数が最も多い日本文学作品である。1930年代からつい最近の2007年にわたる様々な時期において『春琴抄』の翻訳が見られ、異なる社会・文化背景をもとに翻訳方略と翻訳規範を考察するのにふさわしいテキストだと考えられる。そこで、社会・文化背景が全く異なる1939年と2007年の訳文を取りあげて比較分析することにする。

1939年版は日本軍の支配下で日本語の同化教育、思想統制を強いられた満州国という特殊な時期に翻訳された。当時日本から渡ってきた作家たちによる創作が活発になり、ほかの地域より日本文学の翻訳が盛んに行われた。さらに、五・四新文芸運動後の直訳の影響もあって、文言文(文語体)と白話文(口語体に近いスタイルの文章語)、中国固有の語彙と日本から取り入れた漢字語彙が競合する時期でもあった。2007年版はグローバル化時代のもとで社会・文化・経済がよりバランスよく発展し、中日間の交流が最も盛んな時期に翻訳されたものである。この時期には政治的イデオロギーによる影響が最低限に抑えられ、日本文学が全面的に紹介された。さらに、中国語の言語規範が固まり、かつて日本から輸入された漢字語彙も多数が中国語として定着し、流暢な訳文を多く産出した。本稿は、このような異なる背景のもとで、翻訳者はそれぞれどのような翻訳方略を採り、またどのような翻訳規範に左右されたのかを考察しようとする。

2. トゥーリーの記述的翻訳研究と関連理論

従来の翻訳研究は ST に焦点を置きながら、厳復の「信・達・雅」のように、実践から得た経験を「基準」として翻訳者を指導したり、ナイダ(Nida)の「等価」のように、ST と TT を比較して翻訳技法や文法的ずれを探ったりする言語レベルでの研究が中心であった。1970年代ごろから行われた記述的翻訳研究はこのような静的な訳本研究という閉鎖的な領域を乗り越えて、TT を目標文化のポリシステムに位置づけ、マクロ的な視点から翻訳を研究しようとした。

トゥーリー(Toury 1995)の記述的翻訳研究はイーヴン＝ゾウハー(Even-Zohar, 1978/1990)の文学ポリシステム理論を基にして発展してきたものであり、記述的翻訳研究において最も代表的である。

まず、イーヴン＝ゾウハーの翻訳理論を簡単にまとめると、この理論は翻訳文学を目標文化のより大きな社会・文学・歴史的システムの中で作動している、一つのシステムだと考えた(Munday, 2001)。ポリシステムでは、各文学システムが階層的に存在しており、それが「中心的位置」にあるのか、「周辺的位置」にあるのかということが問題視される。翻訳文学は一般的に周辺的位置を占めているが、以下の3つのケースで、中心的位置を占めることができる。a) 「若い」文学が成立しつつあるが、まだポリシステムを形成していない状態、b) 小国の文学がほかの大国の文学に圧倒されているような場合、c) 文学の危機的時点、文学システムに真空状態が生じた時である。文学ポリシステムにおける翻訳文学の位置がどのような翻訳方略を用いるのかを左右する。翻訳文学が中心的位置を占めると、翻訳者は目標文化内に既存の文学

規範を破壊するような異化的な翻訳を行う。逆に、翻訳文学がポリシステムにおいて周辺的位置にあれば、翻訳者は目標文化の既存の文学規範に倣って同化的な翻訳を生み出す。

イーヴン＝ゾウハーの理論を発展させたトゥーリーは、翻訳はまず何よりも目標文化の社会、文学システムの中にある位置を占めるものであり、この位置がどのような翻訳方略を採るかを決定すると考えている(Toury, 1995:13)。さらに、翻訳とは規範(norms)に支配された活動であり、規範が「実際の翻訳に現れる等価(タイプと範囲)を決定する」と考える(ibid.:61)。規範とは「ある共同体に共有されている、何が正しくて、何が間違っているのか、何が適切で何が不適切なのかといった一般的価値と考えの翻訳を特定の状況に適用させる作業指示で、特定の行為において何が指示・禁止され、もしくは許可・容認されるのかを明らかにする」ものであり、ある文化、社会、時代に固有の社会文化的制約である。翻訳はSTとTTの二つの言語、文化の伝統に関わり、様々な段階で二つの規範システムが関与する活動である。したがって、翻訳規範はある意味では翻訳者が異なる言語、文化、テキストの伝統的規範から取捨選択したものであると言える(ibid.: 55-57)。

翻訳のプロセスにおいて、様々な段階で異なったレベルの規範が働いている。

まずは、特定の言語、文化、時代において、翻訳作品の選択を決める要因となる予備的規範(preliminary norms)であり、翻訳に媒介言語があるか否かなどマクロ的な側面が含まれる。予備的規範のもとで、翻訳者は目標言語の社会、経済、政治と文化状況はどんなタイプの翻訳作品を受容するのか、どんな読者層を対象に想定するのか、さらに目標文化はどれだけ重訳を容認するのかという問題を考慮に入れておく。一般的に言えば、目標文化の規範に合った作品が翻訳、受容される。

次は、翻訳者がSTとTTとの間で行った一般的な選択に関わる初期規範(initial norms)である。初期規範は翻訳者が実際翻訳を行う前に考えておくべき問題であり、翻訳規範の基本となるものである。初期規範のもとで、翻訳者は起点文化、言語の規範と目標文化、言語の規範の間でどちらに従うのかを決める。STの規範に従えば、TTは「適切」(adequate)な翻訳になり、起点文化、言語をできるだけTTに再現しようとする。逆に、目標文化の規範に従えば、「受容可能」(acceptable)な翻訳がなされて、目標文化の言語、文化規範が十分に役割を果たし、TTの受容度が高まるが、STから逸脱することもある(ibid.: 57-61)。具体的な翻訳方略で言うと、「適切」な翻訳は一般的に異化的な翻訳方法を採用、「受容可能」な翻訳は同化的な翻訳方法を採用ことになる。初期規範の選択はTTの全体の雰囲気に関わり、目標言語の読者の受容にも影響を与え得る。TTがどの規範に従って翻訳されるのかは目標文化の社会、文化状況と文学ポリシステムによって決定される。このように、翻訳文学を位階的システムの一部と考えることは記述的翻訳研究とポリシステム理論とのつながり方をよく示している(Munday, 2001)。イーヴン＝ゾウハーの文学ポリシステムと関連付けて考えると、訳文が「適切」であれば、翻訳文学が文学ポリシステムにおいて、中心的位置を占める時と同じく異化的な翻訳方略を採る。他方、「受容可能」な翻訳が行われた場合は、翻訳文学が周辺的位置に置かれた時と同じく同化的な翻訳方略を採ると言えよう。

最後は、翻訳プロセスにおける実際の選択を行う運用規範(operational norms)である。運

用規範は翻訳プロセスにおける実際の選択を行う規範であり、翻訳行為のミクロ的選択に関わる。主としてTTにおけるパッセージの脱落や追加、再配置などを含む提示の仕方と語彙項目、句、文体的特徴の選択など言語的要素を記述するものである。

予備的規範は論理的に、そして実際に運用規範より上位に置かれている。運用規範の選択は初期規範に左右され、初期規範を記述するための言語的素材としても扱われる。これら三つの翻訳規範はSTの選択からTTの翻訳方略、実際の翻訳方法の選択にわたる、すべてのプロセスにおいて作動している。同一作品でも翻訳者によっては翻訳した作品の雰囲気が変わるのは特定の時期において翻訳者が異なる翻訳規範を取捨選択した結果であると考えられる。

以上の通り、トゥーリーの記述的翻訳研究の利点は、翻訳をその目標文化の文脈に置こうとしたことであり(Munday, 2001)、様々な翻訳を許容する立場に立って、同一作品の数回にわたる翻訳にそれぞれ適切な位置づけを探り出したことであると言えよう。

トゥーリーは系統的な記述的翻訳研究のために、以下の3段階の方法論を提案した。まず、TTを目標文化システムの中に位置づけ、その意義と受容性を分析する。次に、STからTTへのシフトを比較し、「対照ペア(coupled pair)」の対応関係を確認し、翻訳規範をまとめる。最後に、作用している翻訳規範を再構築して今後の翻訳行為の法則を導き出す。本稿は、トゥーリーのこの方法論に倣って、ほぼ70年近くも離れた『春琴抄』の二つの中国語訳について考察する¹。まず、3節では予備的規範について記述する。二つのTTをそれぞれ社会・文化システムの中に位置づけ、その意義と受容性を検討する。4節では、運用規範について記述するとともに、STから漢字語彙と慣用句を「対照ペア」として取りあげ、二つのTTと比較分析する。5節では、初期規範を中心に翻訳方略と作用している翻訳規範への記述を試みる。

本稿では、便宜上、直訳・意識という用語を用いるが、これは翻訳技法としての善し悪しを検討するためではなく、翻訳方略と翻訳規範を探るための手段として扱っている。

3. 『春琴抄』と中国語訳

昭和8年(1933年)に「中央公論」に発表された『春琴抄』は「谷崎文学の最傑作と呼ばれている」²。川端康成も「谷崎潤一郎氏の『春琴抄』(中央公論)は、ただ感嘆するばかりの名作で、言葉がない」³と高く評価している。『春琴抄』は中国で翻訳回数が最も多い谷崎作品であり、少なくとも七つ(1936年、1939年、1980年、1984年、1991年、2000年、2007年)以上の中国語訳がある。本稿では、1939年の穆儒丐訳の《春琴抄》と2007年の鄭民欽訳の《春琴抄》をテキストとして取り上げる。まず、二つのTTの成立した社会・文化背景からその意義と受容性を確認する。

3.1 穆儒丐⁴訳の『春琴抄』(以下穆訳と略記)

穆儒丐訳『春琴抄』は1939年に満洲『盛京時報』に掲載したものであるが、1942年に『谷崎潤一郎集 現代日本文学選集 第四巻 春琴抄』として芸文書房出版から出版された。穆訳は訳者あとがきで、「作者谷崎潤一郎は現在日本文壇の大御所の一人であると同時に、世

界に知られている文豪でもある。文芸界で谷崎を知らない人は非常に少ないだろう。彼は、天才・奇才・鬼才を兼ねた人であるので、『悪魔派』という称号が与えられた。彼の創作はその独自性から他者の追従をゆるさず、大陸ではわたしが 10 年前に『麒麟』と『金と銀』を翻訳したくらいで、あまり翻訳されていない。しかし、当時の満洲では文学が普及していなかったため、紹介しても実際にはほとんど注目されなかった。この作品は前の二作品のように無名のままではないとは思いますが、自信を持って言っているわけではない。」(筆者訳)と述べたように、『春琴抄』の翻訳が受容されるような文学の環境が多少は整ってきていると推測できるだろう。

社会情勢と時代背景としては、1931 年の満州事変後、日本軍が満州全土をほぼ占領し、現地の抗日運動との衝突が激化していた。日本軍は国際世論の批判を避けるため、傀儡政権の樹立へと方針を転換した。したがって、1932 年に清朝の最後の皇帝であった溥儀を新国家の皇帝とする満州国(1932-1945)の建国が長春で宣言された。その後、1937 年の盧溝橋事件を発端として日中全面戦争が始まり、日本軍は中国全土へ進出した。

日中戦争の期間、中国社会は国民党統治区域、共産党統治区域(解放区)、被占領区域という三つの地域に分けられていた。政治イデオロギーの影響で地域によって異なる文学システムを形成し、民族意識、翻訳文学の発展もそれぞれ異なっていた。国民党統治区域というのは、主に重慶、桂林、昆明など国民党が統治した地域を指し、この地域では欧米を代表とする西洋の文明が流行っていた。共産党統治区域とは、延安を中心とする抗日根拠地で、マルクス主義とソ連文化の影響を受けて、プロレタリア文学を中心に翻訳が行われた。この二つの区域においても、日本文学は紹介されたものの、批判的な立場で作品を受け入れ、主に反戦の文学作品が紹介された。被占領区域は日本軍に支配された満州国と上海、南京を中心とする華中被占領区域などが含まれ、厳しい文化統制が行われた地域である(陳 2005)。

以上の背景を踏まえて、本稿は中国全体を社会背景として扱うのではなく、被占領区域である満州国に絞るという立場を取る。穆儒丐が長年勤めた『盛京時報』はまさに満州国に位置していた。満州事変後、日本軍の支配下で文学作品の基点であった文芸新聞も様々な原因で発行停止となり、現地の文人による文学創作は停滞状態になった。一方、満洲に駐在した日本人作家による創作は異常なまでに盛んであった。盧溝橋事件後、日本軍は満州国について思想統制を強めるために、日本語教育を含む同化政策を行い、文化宣伝の権力も握った。1939 年には「満州書籍配給株式会社」が設立され、主に日本の書籍を大量に輸入し、思想統制と満州国内の出版流通の一元的管理、統制を行った。そのほかに、満州文学を発展させるために、「満州文話会賞」、「建国記念文芸賞」、「満州国民生部大臣賞」のような文学賞も設けられた。このように、日本軍は苦心して日本文学を満州国に移植し、日本文化を宣揚しようとしたため、一般作品の翻訳でも政治目的に利用されるという先入観から抜け出すことができなかった。当時の中国全土にわたる日本文学の翻訳を見ると、1920 年～1937 年の間に翻訳された単行本は 270 種類以上あったが、1937 年 7 月～1949 年の間は戦乱で 50 種類余りに激減した(王 2001: 173)。そして、その多数が被占領区域で出版、紹介された。

さらに、『春琴抄』のあらすじにも注目すべきである。大阪道修町の薬種問屋の次女で盲目の春琴は容貌が端麗で、才能があるが、高慢でわがままな性格の持ち主である。春琴には幼

いころから身の回りの世話をする丁稚の佐助がいて、春琴に惹かれながら献身的に仕えていく。後年、春琴は何者かに熱湯を注がれて、顔に怖い火傷をしてしまう。佐助は春琴の顔を見ず、心の中に永遠の美を残すために針で自分の目を突いた。佐助が春琴に献身的に仕えていく姿はまさに満州国に対して思想統制を行った日本軍の目的と囚らずも一致したと考えられる。このように、『春琴抄』は社会背景と作品自体において受容される必然性を持っていたと言えよう。

3.2 鄭民欽⁵訳『春琴抄』(以下鄭訳と略記)

鄭民欽訳『春琴抄』は 2007 年に北京燕山出版社によって出版された。鄭訳は訳者まえがきにおいて、「我が国の読者にとって、『悪魔主義者』と呼ばれる日本現代耽美派の文学大家谷崎潤一郎はお馴染みの日本作家である。彼の作品の多くが我が国で翻訳され、研究も大量に行われてきた。彼の作品は全体的には陰鬱的、奇形的な官能美を通して人間の側面を追求し、人間がこの社会に存在する合理性を考え、日本の国民性を分析する」(筆者訳)と述べた通り、作者とその作品が中国の読者に理解され受け入れられていることが分かる。

そして社会背景として考慮すべきは、改革開放(1979年)以来、中日両国間は経済、政治、社会、文化など様々な面において頻繁な交流が行われたことである。改革開放によって中国人の思想が解放され、多くの人が文化的閉鎖から抜け出し、読書を通して外の世界を覗いてみようとした。一方、日本の技術、商品など物質文化が大量に輸入されるに伴って、日本の物質文化との接触の中で日本の文化、文学への理解を深めようとする意欲が刺激された。したがって、文学における交流も積極的に行われ、日本作家と作品が大量に中国に紹介、翻訳された。中国各地の出版社と「世界文学」、「訳林」、「外国文学」などの文芸雑誌が日本文学を紹介、翻訳する場となった。日本語学部を設置した大学が増えるとともに、日本語、日本文化に熟達した人や日本留学経験のある教師、研究者、翻訳者が現れ、日本文壇の動きを敏感に捉え、積極的に中国に紹介してきた。日本文学の翻訳は単純に作者のイデオロギーをもって作品を評価するのではなく、様々な視点から日本の作家を紹介するとともに、名作と呼ばれる作品だけが数回にわたって翻訳される単一性から、様々なレベル、ジャンルの翻訳へ移る全面性を見せた。1980年代からの20年間で日本文学の訳本は1400種類(翻訳し直しも含む)に上り、過去100年の訳本総数の3分の2を占めている(王 2001: 242)。

谷崎潤一郎は日本耽美派の代表者、ノーベル文学賞の候補者として中国でよく知られている。80年代以降、『春琴抄』は谷崎文学の代表作として紹介され、「女性崇拜、日本古典への回帰、マゾヒズム」など様々な視点からの研究が多数行われてきた。1976年の『春琴抄』(山口百恵と三浦友和主演、1991年に中国中央テレビ局で公開)の映画化と中国における山口百恵の人気上昇も『春琴抄』の紹介に一臂の力になったと考えられる。さらに、2006年には『春琴抄』が中国で劇化され、反響を呼んだ。『春琴抄』を脚色した越劇⁶『春琴伝』は中国民間劇種で日本の文学題材を扱おうとした試みであったと評価されている(戴 2006)。このように、『春琴抄』は文学の領域を越えて、ほかの領域にも受容されていく。

以上の社会・文化背景からも分かるように、この二つの TT の産出は決して予想外のことで

はなく、目標文化において受容されるような環境が整っていた。さらに、二つとも媒介言語が不在しない、日本語からの直接翻訳である。

4. 原文と訳文の比較分析

この節では、まず運用規範に従って、TT のミクロ的な特徴をそれぞれまとめておく。

『春琴抄』は文章体で書かれ、現代日本語では馴染みのない漢字語彙を大量に使い、改行、句読点、引用符などの記号文字が極めて少ない文体が特徴である。ST は改行と句読点が少ないため、パラグラフがほぼ章に当たる。穆訳も鄭訳もともに、翻訳作品を理解しやすくするために、自分なりに新たに段落分けし、句読点も通常のテキストと同様に使っている。穆訳は数ページごとに注がまとめられており、漢字語彙と日本漢字を中心に 30 箇所ある。鄭訳は歴史人物と固有名詞の説明を中心に脚注が 13 箇所ある。

穆訳の翻訳の特徴の一つは追加が多く行われたことである。「文章の中で、省略したのは 1%しかなく、補足した文は 10%ぐらいある。これで誤訳が出てきたら、まさに私の責任である」⁷ (筆者訳) が、あくまでも原文の文脈に従った内容の補足であり、作品の理解を妨げるような箇所は特にない。鄭訳は追加も省略もほとんどない。文体的特徴としては、穆訳は「谷崎のこの原作は気取った文章体なので、白話文にしすぎるのもよくない。それで、文言文と白話文を混用し、原作から遠ざけないようにしている」⁸ (筆者訳)。鄭訳では『鴟屋春琴伝』のみ「文言文」を以て書かれており、それ以外は現代文章語に翻訳している。

以上、運用規範に従って翻訳特徴を考察してみたが、以下は初期規範を導き出すための実例を取り挙げる。具体的な対照比較は紙面の関係で漢字語彙と慣用語に絞って分析する。

4.1 漢字語彙

3 節で述べたように、「穎悟、端麗」のような、馴染みのない漢字語彙を大量に用いたのが原作の特徴の一つである。そこで、作品全体から穆訳が ST の漢字語彙を借用したと思われる箇所をピックアップした。全部で 48 箇所(付録の語彙リスト参照)見つかった。それを鄭訳と比較し現代中国語からみて違和感のある語彙を次の 4 種類に分けて分析した。

- ① かつて中国語でも使っていたが、現代中国語においてはあまり使われない語彙、および時代の流れを背負ったような語彙(気品、愛嬌、花柳病)。中国古典の影響を受けたものが多い。

例 1 ST:風眼というものは人も知る如く花柳病の黴菌が眼の粘膜を侵す時に生ずるのであるから……(p.240)

穆訳:這裏所說的風眼, 是盡人所知乃是由于花柳病的黴菌……(p.13)

鄭訳:所謂風眼, 众所周知, 是性病的細菌侵入眼黏膜引起的。(p.7)

「花柳病」とは「尋花問柳」の病気として昔から記載されていた。現代中国では時代劇に出てくる言葉となり、日常的には「性病」と言う。

- ② 日本語と中国語がほぼ同義で使われてはいるが、文脈によっては違和感のある語彙(輸

入、修業)。

例 2 ST:彼女が幼い頃はまだ写真術が輸入されておらず…… (p.239)

穆訳:因爲在她幼小的時候, 攝影術還不曾輸入…… (p.12)

鄭訳:她年幼之時, 照相術尚未传入日本…… (p.6)

写真技術の「輸入」は現代中国語では「传入, 引进」で表し、「輸入」といえば、「入力」の意味で用いられるのが普通である。

③ 漢字の表記は同じだが、意味が完全に異なり、誤解を招きやすい語彙(顔色、真面目)。

例 3 ST:(佐助は)顔色でそれと察した。(p.270)

穆訳:壹看她的顔色, 便知有異。(p.64)

鄭訳:一看春琴的脸色, 就知道出了什么事。(p.36)

現代中国語でも漢字「顔」は「笑顔」のように顔を指すことがあるが、「顔色」は「顔」とは関係なく「色彩」を指しており、穆訳の別の箇所にある「紙的顔色」(紙の色)と混同しやすい。

④ 中国語にはない日本語の語彙(素人、雨戸、押入)。中国語として意味が通じないため、穆訳はほとんど注を付けている。

例 4 ST:それでなくても天井裏は蒸し暑いのに押入の中の夏の夜の暑さは格別であつたに違いないが…… (p.246)

穆訳:本來在盛夏的夜中, 這間屋頂的小屋, 已經蒸熱的了, 押入的裏面, 已不更格外悶熱…… (p.25)

鄭訳:天花板上本來就很悶熱, 可想而知壁櫥里一定是異常酷熱。(p.13)

穆訳と鄭訳を比較してみると、穆訳には日本語の漢字語彙をそのまま借用して直訳する傾向が見られ、たまには中国語として違和感があり、誤解を招きそうな箇所も多数あった。注釈も漢字語彙と日本漢字の解釈に集中しており、「炬燵、太棹」のような日本独特の語彙は借用に注釈を加えた形をとった。さらに、「素人、押入」のように 2 箇所以上出てくる語彙については直訳(素人、押入)と意識(内行、壁格)とを混用し、「増上慢」のような仏教用語については「釈典と儒書は、作者のほうか私より博学なので、原作通り翻訳し、変更はしていない」⁹。ここから ST の漢字語彙の特徴を再現しようとする目的と、日本語の語彙を TT に移植しようとする目的が考えられる。一方、鄭訳は原文の語彙を借用したケースは少なく、ほとんど現代読者に馴染む中国語の語彙に入れ替え、意識がなされた。目標言語の言語習慣に従って、目標文化の読者への意味伝達を優先させている。

以上は穆訳に基づいてまとめた結果であるが、参考までに鄭訳に焦点を置きながら ST からの漢字語彙の借用状況を調べてみた。固有名詞を除いて、「修行」の一箇所しか見つからなかった。このような結果からも穆訳の直訳がさらに浮き彫りになってくるだろう。

4.2 慣用句

ここでは、慣用句や慣用句によって表された比喩表現の例文を取り上げてその翻訳を見ていく。

例 5 ST:「師もしばしば舌を巻きて、あはれこの児、この材と質とを以てせば天

下に嬌名を謳はれんこと期して待つべきに、……」(p.238)

穆訳:毎使教師卷舌驚歎曰:「此兒以如此材質,幾何不姣名噪于天下,……」(p.10)

鄭訳:其師頻頻噴声贊嘆道:“惜哉此子,以其才华素质,可期扬美名于天下,……”
(p.5)

二つの TT とも、「驚嘆、贊嘆」で日本語の「驚きおそれ、あるいは感嘆して言葉も出ない」意味を表わしており、「舌を巻きて」はその様子を表す修飾語として使っている。穆訳は、「舌を巻きて」を漢字そのまま引用した形で直訳しているが、中国語の「卷舌」はただ「巻き舌音」という発音方法の一種類である。鄭訳は「舌を鳴らしたり言い立てたりして、賞賛する場合に用いることが多い」「噴声」に意識したので、後の「贊嘆」を修飾することになる。また、穆訳は直訳とともに ST の引用符「」も借用したが、鄭訳は目標文化の規範に合った“”で引用文を作った。

例 6 ST:(佐助は)一番番頭の前に呼びつけられ大眼玉を食ったうえに……(p.248)

穆訳:那首席執事人,早把眼睛瞪圓,當將佐助大加申訴……(p.29)

鄭訳:于是佐助被叫到大掌柜面前,挨了一頓狠狠的训斥……(p.14)

穆訳は字句の表面上の意味を残したうえで、その実質の意味を加えたが、鄭訳は直接その実質の意味を分かりやすく表現している。

例 7 ST:「佐助は天にも昇る心地して……」(p.249)

穆訳:佐助不當有升天之感……(p.30)

鄭訳:佐助欣喜若狂……(p.16)

穆訳は字面から読まれるままに直訳で比喻表現を残したのに対して、鄭訳はその意味を四字熟語で明示化している。

例 8 ST:折角の悪企みも水の泡になり定めし其奴は案に相違していることござりましよう……(p.277)

穆訳:反正他們的可惡計劃已然全歸水泡,那小子可謂白費心,結果適得其反。
(p.76-77)

鄭訳:他的恶毒阴谋也就化为泡影。这是那个家伙万万没有料到的。(p.44)

穆訳は日本語の漢字をそのまま組み合わせる中国語の表現として使ったが、鄭訳は「泡影」と中国人の読者に馴染む表現に入れ替えて、中国語らしい表現にしておいた。

ほかにも、「卑怯な奴の裏を搔き」、「狸の腹鼓」、「痒い処へ手が届くように」、「火の出るような」、「爪に火を灯すようにして」のような慣用句と比喻表現が多数見られた。穆訳はほとんどの場合直訳して ST の形を保とうとした。一方、鄭訳は内容の伝達と読者の理解を優先し、形よりも内容を重視してほとんどが中国語らしい表現に意識している。

5. 考察

以上のように、二つの TT について比較分析を行った結果、異なる翻訳方略を採り、異なる翻訳規範が働いていることが分かった。漢字語彙と慣用句の翻訳について、穆訳は漢字をそのまま借用したり、慣用句を文字通りに直訳したりして、ST の語彙と表現をできるだけ保ちながら、ST の規範に従って「適切」な翻訳を行った。鄭訳は目標言語の規範に従った「受容可

能」な翻訳方略を目指して、漢字語彙は目標文化に既存の語彙に置き換えたり慣用句を明示化したりして、読者に受容しやすい訳文を作り上げている。

中国における20世紀の文学翻訳は五・四新文芸運動後の10余年の間異化的な翻訳方略を採ったが、それ以外の時期はほとんど同化的な翻訳が中心であった(孫 2002)。五・四新文芸運動は中国近代翻訳史の始まりであった。当時国家存亡の危機に際し文を以て国を救おうとした魯迅¹⁰を中心とした直訳派は、STへの忠実性を守るためにSTの文学規範に従った翻訳を行った。さらに、中国語自体の持つ「欠陥」を補うために、西洋の語彙(日本語も含む)を大量に輸入し西洋言語の語法、句法をも取り入れようとした。中国と日本は同じく漢字文化圏にあるため、日本文学の翻訳には確かに直訳の合理性と利便性があった。この時期は直訳と意訳の善し悪しをめぐる論争が激しく、文言文と白話文が競合していたが、最終的には白話文の発展を促進させることができた。一方、魯迅らによる直訳はぎこちない翻訳調を引き起こすなどマイナスの影響ももたらした。したがって、1930年代に入ってから翻訳方略が逆転し、同化的翻訳が再び中心となった。この時期の文学翻訳の全体的な傾向としては、「神韻(ニュアンス)」を強調して、TTの流暢さと読みやすさを重視し、STの形式はあまり重視されなかった。さらに、STの構成をかつてに変更させることも容認された(ibid.)。

1916年に筆を携えて北京から満州国にやってきた穆儒丐の翻訳は大勢に左右されず、満州という特殊な背景に基づいて、「二十年前、満洲の各新聞、雑誌では、小説を創作する人はまれで、特に外国の名著を訳す人は少なかった。穆儒丐先生だけが、創作をよくし、翻訳をよくし、さらに当時の文言文の勢力のもとで、率直な白話文で著作し、文体の流れの先鞭をつけたのである」¹¹。穆訳には翻訳を通して日本語の語彙を輸入し、白話文の普及を進めようとする意図が窺える。満州国の建国は五・四新文芸運動と同様に歴史的に文学の危機的時点にあって文学システムに真空状態が生じた時期であったため、翻訳文学が中心的位置に移り、STの文学規範に従う直訳が行われたのは当然のことであろう。

一方、21世紀には頻繁な国際間の交流に伴って、STの文学規範に従った異化的な翻訳方略が期待された(孫 1999)が、この時期の日本文学の翻訳は前に比べて質・量とも飛躍したものの、目標言語の自国文学も発展がすさまじいものであり、翻訳文学は文学システムにおいて中心的位置には移っていないと言えよう。さらに、現代中国語の規範が固まり、かつて輸入された日本語の語彙も多数が中国語として定着したため、実際には現代中国語の規範に合った翻訳が多く現れた。訳文も流暢で分かりやすくなり、1920、30年代のような文言文と白話文の混用、日本語的な語句の借用はあまり見られない(王 2001: 244)。鄭訳はこのような翻訳規範を踏まえて意訳を行った。ただし、鄭訳は無批判的に意訳ばかりを押し進めたわけではなく、目標言語の読者の受容力を十分考慮に入れたうえで、適当な箇所には直訳を加えたのである。例えば、目標文化の読者に馴染むだろうと思われる「畳」は「榻榻米(tatami)」と直訳し、起点言語の音を再現しようとした。

かつて魯迅が直訳を主張したのは、STへの忠実を守るためであり、異なる読者をその対象と想定していた。つまり、翻訳する際、まずどのような読者層のために訳すのかを決めることである。魯迅は読者を(甲)しっかりとした教育を受けたもの、(乙)ほぼ字が読めるもの、(丙)ほと

んど字が読めないものに分けているが、甲類の読者を直訳の対象と想定した¹²。穆訳には漢字語彙、慣用句の直訳のほかに、「守り袋は遺品ぞと」のような台詞、鳥の鳴き声、三味線の音なども日本語のまま残して翻訳されず、しかも注も付いていない。したがって、穆訳は上述の甲類、しかも当時の日本語の同化政策のもとで日本語が少しはできる読者を対象に想定したのではないかと推測できる。鄭訳は目標言語の文学規範に合った訳文であり、日本語学習者だけではなく、日本文学・文化に興味を持っている甲類と乙類の読者を対象にしていると考えられる。つまり、穆訳は日本語の知識が備わっていないと、その意味を完全に理解するのに差し支えがあるが、鄭訳は日本語が分かるか否かを問わず、自由に読めるような分かりやすい訳文である。

6. 結び

本稿は、トゥーリーの記述的翻訳研究を参照しつつ、予備的規範、運用規範、初期規範に従って二つの TT を分析し、翻訳方略と翻訳規範の検討を試みたものである。漢字語彙と慣用句の翻訳を比較分析した結果、穆訳は漢字語彙をそのまま借用し、慣用句を直訳して、ST の規範に従った「適切」な翻訳をしている。一方、鄭訳では漢字語彙をほとんど既存の中国語語彙に置き換え、慣用句は意味の伝達を優先し明示化しており、目標言語、文化の規範に従った「受容可能」な翻訳をしている。二つの TT には異なる翻訳方略と翻訳規範が作動していることが判明した。

これは翻訳が完成した社会情勢と文学ポリシステムに関わると考えられる。穆訳は同化政策で日本語教育が強制され日本文学の翻訳が異常に繁盛した満州国で行われ、当時日本文学の翻訳が文学システムにおいて中心的位置に置かれていた。満州国における翻訳も五・四新文芸運動後の翻訳と同じく、日本語の語彙を輸入し、白話文を普及させようとした積極的な意義を有する。読者は魯迅の甲類のしっかりとした教育を受けた人に想定している。鄭訳は中日間の交流が最も盛んなグローバル化社会で行われたが、この時期日本文学の翻訳は目標文化の文学システムにおいて周辺的位置にあるか、もしくは中心ではない位置にあったと言える。さらに、中国語の規範がすでに定着し、日本文学を鑑賞する目的で甲類と乙類の字がほとんど読める読者を対象にしたと考えられる。

以上のように、穆訳は漢字語彙と慣用句レベルで直訳という ST の規範に従った翻訳方略を採ったが、訳者あとがきでは「小説を翻訳する時、ぎこちない直訳を好まない。我々の間には英語のできる人もいないし、そんな翻訳は参考にならない。日本語は英語と違って、教科書と文法書がたくさんあるので、翻訳された小説を教科書とすることはあるまい。それで、小説を翻訳する時、どの国であれ明白で流暢な意識を主張する」と書いてあり、本稿の結論に背馳するようである。穆訳を句、パラグラフレベルで見ると、読みやすさと流暢さのために、追加と描写を展開するような意識的な翻訳がなされているのも事実である。これは、トゥーリーのモデルにおいて対照ペアの選択はアドホックなものであったため、全体的な翻訳方略が必ずしも一致するとは限らない(Munday 2001)という批判への裏付けではないかと考えられる。この点については今後研究を深めることにする。

.....
【謝辞】

本稿を執筆するに当たり、ご指導をいただいた神戸大学国際文化学研究所の藤濤文子教授、並びに有益なコメントをいただいた査読者に心より感謝申し上げます。

【著者紹介】

尹永順(いんえいじゅん/YIN Yongshun) 神戸大学国際文化学研究所言語コミュニケーション講座 研究分野は中国における谷崎文学の翻訳と受容
連絡先:yineijun@hotmail.com

【注】

- ¹ トゥーリーの記述的翻訳研究の最終目的は翻訳規範の構築を積み重ねることによって翻訳の普遍的法則を形成することであるが、本稿はケース・スタディーとして個別作品を扱ったのみであり、普遍的法則を導き出す段階までには至らず、翻訳規範の段階にとどまっていることを断わっておく。
- ² 円地文子 『春琴抄』 谷崎潤一郎(1933) 解説 中央公論社 p.549
- ³ 川端康成「谷崎潤一郎氏の作品」『新思潮』1933年7月号
- ⁴ 穆儒丐(1884-1961)は、もとの名は穆六田、『盛京時報』文芸編集担当時のペンネームで、創作と翻訳作品の多くをこのペンネームで発表した。穆儒丐は1884年に北京で満州旗人として生まれ、1905年に官費留学生として日本に6年間留学し、帰国後、短期間軍官の秘書、教師、『国華報』の編集を歴任した。1916年に瀋陽に渡って、日本人経営の新聞社『盛京時報』文芸欄『神皋雜俎』の編集者となり、満洲国崩壊までずっとここで作品を発表し続けた。1939年には歴史小説『福昭創業記』で満洲国の第三回文芸盛京賞と第一回「民生部大臣賞」を受賞した。満洲国崩壊後の活動については、寧裕之と名前を変えて、1953年に北京市文史研究館館員に招かれたとしか知られていない。
- ⁵ 鄭民欽(1946-)は1969年に北京外国語大学の日本語学部を卒業し、1973年から中国国民対外友好協会部長、中日友好協会副秘書長、慶応大学の招へい研究者、北京大学日本研究センターの特約研究員、中国日本文学研究会理事を歴任する。1991年には中国作家協会に入会し、『孔子』(井上靖)、『性的人』(大江健三郎)、『東京人』(川端康成)などを翻訳し、『日本和歌俳句史』、『顫動着时代痛苦的心灵』などの著作がある。
- ⁶ 越劇は中国の主要な劇(浙江省の地方劇)の種類の一つで、20世紀の初めに発祥した。メロディーは優雅婉曲で、こく叙情的なものである。
- ⁷ 穆儒丐譯(1939) 譯後語《春琴抄》藝文書房出版
- ⁸ 以上同
- ⁹ 以上同
- ¹⁰ 永田小絵(1996)『『信達雅』をめぐる中国近代の翻訳論』
<http://nikka.3.pro.tok2.com/cino.htm> [2009/6/1]
- ¹¹ 翠羽(1944)『穆儒丐先生』《藝文志》壹卷六號、ここでは村田裕子(1989)の翻訳に拠る。
- ¹² 魯迅(1931)『二心集』

【作品】

谷崎潤一郎(1933)『春琴抄』 中央公論社
—(1939)『春琴抄』穆儒丐譯 藝文書房出版

一 (2007) 《春琴抄》 郑民钦译 北京燕山出版社

【参考文献】

- Baker, M. (2004). *Routledge encyclopedia of translation studies* (《翻译研究百科全书》).
Shanghai: Shanghai Foreign Language Education Press.
- Even-Zohar, I. (1978/1990). 'The position of translated literature within the literary polysystem'.
In Venuti (Ed.). *The translation studies reader*. London/ New York: Routledge. 192-197.
- Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. London/New
York: Routledge.
- Toury, G. (1985). 'A Rationale for Descriptive Translation' (江帆 訳). In 《当代国外翻译理论
导读》谢天振 主编 (2008) 南开大学出版社.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam/Philadelphia: John
Benjamins.
- 川端康成 (1933) 「谷崎潤一郎氏の作品」『新思潮』7月号
- 長井裕子 (2007) 「穆儒丐の生涯に関する二、三の補足」『大学院国際広報メディア研究科
言語文化部 紀要』52 北海道大学
- 村田裕子 (1989) 「一満州文人の軌跡—穆儒丐と『盛京時報』文芸欄」『東方学報』第61冊
京都大学人文科学研究所
- 陈 言 (2005) 《抗战时期翻译文学述论》《抗日战争研究》第04期
- 陈玉刚 主编 (1989) 《中国翻译文学史稿》中国对外翻译出版公司
- 翠 羽 (1944) 《穆儒丐先生》《藝文志》壹卷六號
- 林克难 (2001) 《翻译研究：从规范走向描写》《中国翻译》第6期
- 鲁 迅 (1931) 《二心集》
- 王向远 (2001) 《二十世纪中国的日本翻译文学史》北京师范大学出版社
- 王向远 (2005) 《“笔部队”和侵华战争：对日本侵华文学的研究与批判》昆仑出版社
- 孙致礼 (1999) 《翻译：理论与实践探索》译林出版社
- 孙致礼 (2002) 《中国的文学翻译：从归化趋向异化》《中国翻译》第1期
- 张思洁 (2004) 《描述翻译学中的工具理性反思》《解放军外国语学院学报》第27卷第4期
- 赵 宁 (2001) 《Gideon Toury 翻译规范论介绍》《外语教学与研究》第33卷 第3期

Web サイト

- 吕钦文 (n.d.) 《东北沦陷时期文学》
<http://www.chinabaik.com/article/sort0525/sort0541/2007/20070729156507.htm>. [2009/6/1]
- 郑民钦プロフィール：<http://baik.baidu.com/view/1046602.htm>. [2009/6/1]
- 戴 平 (2006) 《评论：移步又换形的〈春琴传〉》
<http://news.sina.com.cn/o/2006-12-20/101210820022s.shtml>. [2009/6/1]
- 永田小絵 (1996) 『信達雅』をめぐる中国近代の翻訳論

<http://nikka.3.pro.tok2.com/cino.htm> [2009/6/1]

【付録】

漢字語彙比較表

以下は穆訳が ST から借用した漢字語彙をもとに、文脈から違和感があり、現代中国語と比べて不自然に思われた語彙を集めて作った表である。

ST	穆訳	鄭訳
生漉き	生漉	纯树皮
気品	氣品	气质
写真	寫真（像片）	照片
輸入	輸入	传入
愛嬌	愛嬌	和蔼亲切
打算的	有打算的	算盘精
師匠	師匠*	师傅
素人	素人*（内行）	内行
玄人	玄人*（外行）	外行
批難（非難－筆者注）	非難	责难
氣象	氣象	气质
青白い	青白	苍白
顔色	顔色	面部表情，脸色
押入れ	押入*（壁格）	壁橱
素質	素質	性格
大家	大家	大师
寒稽古	寒課*	冬练三九
午前四時	午前四時	凌晨4点
苦情	苦情	抱怨
雨戸	雨戸*	防雨窗
披露	披露	表演
独習	獨習	自学
逸話	逸話	逸闻
滞在	滞在	住
給仕	給仕	佣人
次の間	次間	隔壁房间
暮方	暮方	天黑
人形	人形	木偶
蒸し暑い	蒸熱	闷热

上達	上達	长进
気質	氣質	脾气
盆暮れ	盆暮*	逢年过节
駕籠舁き	擔駕籠的	轿夫
痴漢	痴漢	好色之徒
こたつ (炬燵—筆者注)	炬燵*	被炉
格式	格式	身分
障子	障子	纸拉门
真面目	真面目	一本正经
麒麟児	天才麒麟児	天才儿童
自業自得	自業自得	自作自受
太棹	太棹*	低音三弦琴
修業	修業	学到真本领
意地の悪い	惡毒意地	存心的刁难折磨
増上慢	増上慢	狂妄骄横
瘦腕	瘦腕	不算富裕
三昧境	三昧化境	最高妙境
命日	命日	忌日
両親	兩親	—

*は訳文に注がついているものをさす。

()の中は意識で、同じ語彙が2回以上現れた場合、直訳と意識を混用した例である。

